

注 意 事 項

1. 試験問題の数は 50 問で解答時間は正味 2 時間 25 分である。
2. 試験問題の持帰りを認めない。
3. 解答方法は次のとおりである。
 - (1) 各問題には a から e までの五つの答えがあるので、そのうち質問に適した答えを一つ選び、次の例にならって答案用紙に記入すること。

(例) 101 県庁所在地はどれか。

- a 栃木市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

正解は「c」であるから答案用紙の


101 a b c d e のうち c をマークして

101 a b c d e とすればよい。

- (2) 答案の作成には HB の鉛筆を使用し、濃くマークすること。

良い解答の例…… (濃くマークすること。)

悪い解答の例…… (解答したことにならない。)

- (3) 答えを修正した場合は、必ず「消しゴム」であとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色が残ったり「」のような消し方などをした場合は、修正したことにならないので注意すること。
- (4) 1 問に二つ以上解答した場合は誤りとする。
- (5) 答案用紙は折り曲げたりメモやチェック等で汚したりしないよう特に注意すること。

1 68歳の女性。右肺に限局した肺癌と診断され、すでに悪性腫瘍であることが伝えられている。主治医は治療法として手術が最も適切であると判断し、手術を受けようように説明した。ところが、患者は手術を受けたくないと答えたため、繰り返し手術の必要性、手術の危険性、手術を受けなかった時の不利益およびその他の治療法を説明した。患者はその内容を十分理解したが手術を拒否した。意識は清明で、判断能力はある。

主治医の対応として適切なのはどれか。

- a 医師には裁量権があるのでこの方針に従ってほしいと言う。
- b 家族の中のキーパーソンに判断を一任する。
- c 患者の意向を尊重し治療方針を決める。
- d 手術以外の治療では責任が持てないと言う。
- e 担当を外れたいと病棟医長に申し出る。

2 61歳の男性。C型肝炎から肝硬変になり加療中であった。病院から自転車で帰宅の途中転倒し、左前額部を打撲し救急搬入された。治療の甲斐なく2日後に死亡し、病理解剖で左前額部挫創、180gの左硬膜下血腫、肝硬変および3cm大の肝細胞癌が認められた。

死亡診断書の「直接死因」欄に記入するのはどれか。

- a 左前額部挫創
- b 左硬膜下血腫
- c C型肝炎
- d 肝硬変
- e 肝細胞癌

3 5歳の女儿。娘ののどが閉じているようだと言った母親に連れられて来院した。生来健康であり、症状はない。口腔内の写真(別冊No. 1)を別に示す。頸部リンパ節腫大は認めない。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察
- b 頸部 CT
- c 薬物療法
- d 手術療法
- e 放射線治療

別 冊
No. 1 写 真

4 1か月の乳児。健康診査で黄疸を指摘されたので来院した。在胎40週、身長50 cm、体重3,000 gで出生した。周産期に異常はなく、黄疸は日齢2に出現した。母乳栄養で哺乳時間は10～20分である。排便回数は1日3回で、便は軟らかく黄色である。機嫌は良好である。身長55 cm、体重4,500 g。体温37.2℃。脈拍120/分、整。皮膚と眼球結膜とに黄疸を認める。腹部はやや膨隆し、肝を右肋骨弓下に1 cm 触知する。脾は触知しない。尿所見：蛋白(-)、糖(-)、ビリルビン(-)。血液所見：赤血球400万、Hb 12.0 g/dl、Ht 36%、白血球11,900、血小板32万。血清生化学所見：血糖80 mg/dl、総蛋白7.0 g/dl、総ビリルビン6.8 mg/dl、直接ビリルビン0.3 mg/dl、AST 35 単位(基準40以下)、ALT 30 単位(基準35以下)。

この乳児の黄疸と最も関係があるのはどれか。

- a 遺 伝
- b 授 乳
- c 免 疫
- d 貧 血
- e 感 染

5 53歳の男性。早期胃癌の診断を受け、主治医からの手術前の説明を受けに夫妻で訪れた。主治医は、手術内容と予後とを丁寧に説明し、夫妻は5年生存率が95%であることを理解した。しかし、夫妻ともに今後への不安が大きく、妻から「先生、主人は本当に大丈夫なんでしょうか。」と尋ねられた。

夫妻の不安軽減に適切な主治医の対応はどれか。

- a 「胃癌の手術には100%の成功はありません。」
- b 「今そんなに心配しても仕方ないと思います。」
- c 「完璧でなければ手術をしたくないのですか。」
- d 「どのようなことが心配なのですか。」
- e 「手術を試みなければわかりません。」

6 54歳の男性。2時間前に始まった胸背部痛を主訴に来院した。10年前から高血圧で治療中である。服薬は不規則で降圧薬を飲み忘れることが多い。30年前からタバコを毎日20本吸っている。顔貌は苦悶状で全身の冷汗を認める。血圧は右上腕で160/100 mmHg、左上腕で140/80 mmHgである。心尖部に2/6度の拡張期雑音を聴取するが、呼吸音に異常は認めない。

最も考えられるのはどれか。

- a 急性心筋梗塞
- b 解離性大動脈瘤
- c 閉塞性動脈疾患
- d 急性肺炎
- e 胆石症

7 20歳の女性。早朝からの急激な下腹部痛を主訴に救急車で来院した。月経は28日型、整。2か月前から無月経となり、尿妊娠反応は陽性である。腹部は膨隆し、Douglas窩穿刺で新鮮血を吸引した。

この患者にみられるのはどれか。

- a 浮腫
- b 黄疸
- c 胸痛
- d 血圧低下
- e 下血

8 27歳の男性。咳と痰が止まらず、息苦しくなったので来院した。前日は初秋のハイキングに出かけたが、夕方から風邪ざみとなった。今朝から、寒気がして咳と痰が出始めた。呼吸が困難となり呼気とともにヒューという音がする。意識は清明。体温36.8℃。呼吸数22/分。脈拍96/分、整。血圧126/78 mmHg。肺野全体に金属性の笛を吹くような音が聴取される。

最も考えられるのはどれか。

- a 過換気症候群
- b 急性気管支炎
- c 緊張性気胸
- d 気管支喘息
- e 肺炎

9 60歳の男性。物忘れを主訴に来院した。1年前から物忘れを自覚していたが徐々に増悪し、最近では大事な約束を忘れてたり物の置き忘れが目立ってきた。診察時、意識は清明で病歴聴取にも協力的であるが、生活史に関する質問に対して想起できなかったり誤りが目立つ。

この患者の見当識を調べるのに適切な問いかけはどれか。

- a 「今日は何年何月何日ですか。」
- b 「自宅の電話番号を教えてください。」
- c 「日本の首都はどこですか。」
- d 「奥さんの名前を教えてください。」
- e 「これから言う数字を逆から言ってください。3-5-2-9。」

10 20歳の女性。腹部の不快感を訴えて来院した。身長160 cm、体重43 kg。腹部の診察を行った。

触知すると異常なのはどれか。

- a 肝臓辺縁
- b 脾臓
- c 右腎臓
- d 腹部大動脈
- e 第4腰椎

11 48歳の女性。昨日からの激しい心窩部痛、悪心・嘔吐および発熱のため来院した。身長158 cm、体重66 kg。体温38.5℃。眼球結膜に黄染はない。右季肋部にBlumberg徴候を認める。尿所見：濃褐色、蛋白(-)、ウロビリノゲン1+、ビリルビン1+、沈渣に赤血球0/1視野、白血球2~3/1視野。血液所見：赤血球480万、Hb15.0 g/dl、Ht41%、白血球13,500(桿状核好中球11%、分葉核好中球68%、好酸球2%、好塩基球1%、単球5%、リンパ球13%)。血清生化学所見：総ビリルビン1.5 mg/dl、直接ビリルビン1.0 mg/dl、AST46単位(基準40以下)、ALT41単位(基準35以下)、アルカリホスファターゼ290単位(基準260以下)、アミラーゼ180単位(基準37~160)。

最も考えられるのはどれか。

- a 胃潰瘍
- b 十二指腸潰瘍
- c 胆嚢炎
- d 急性膵炎
- e 虫垂炎

12 24歳の男性。朝から悪心・嘔吐と心窩部痛とがあったが、夕方になり発熱し、右下腹部が痛くなったので来院した。体温37.6℃。脈拍92/分、整。呼吸、血圧に異常はない。白血球13,400(好中球86%)。

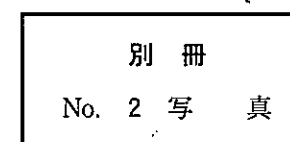
炎症の壁側腹膜への波及を示唆するのはどれか。

- a 腸雑音亢進
- b 心窩部圧痛
- c 左側腹部圧迫による疼痛増強
- d 右下腹部触診時の反射的筋緊張
- e 右背部叩打痛

13 60歳の男性。生来健康であったが、健康診査で尿の異常を指摘され来院した。高倍率の尿沈渣検鏡写真(別冊No. 2)を別に示す。

矢印が示すのはどれか。

- a 赤血球
- b 白血球
- c 細菌
- d 真菌
- e 上皮細胞



14 75歳の男性。2か月前から声がかすれるようになり来院した。来院時の血圧は180/100 mmHg。胸部エックス線写真で左第1弓の突出がみられた。

まず行う検査はどれか。

- a 負荷心電図
- b 胸部造影CT
- c 肺動脈造影
- d 冠動脈造影
- e 呼吸機能

15 75歳の女性。意識障害のため入院中である。深夜に38℃の発熱がみられた。尿検査の結果、尿路感染症が疑われ、尿培養と血液培養とを行った。次いで抗菌薬の投与を開始することにした。

安全管理上、適切でないのはどれか。

- a 看護師に口頭で指示する。
- b 同姓患者の有無をチェックする。
- c 薬剤の投与経路を確認する。
- d 紛らわしい薬品名があるか注意する。
- e 薬剤の用量・単位を確認する。

16 36歳の女性。C型慢性肝炎で入院中である。インターフェロンと新しい経口抗ウイルス薬との併用による第Ⅲ相臨床試験に、同意を得て参加してもらった。ところが、開始後2週目に全身倦怠感が出現したので、この臨床試験への参加を中止したいと申し出てきた。この時の血清ALT値は開始時よりも低下していた。

臨床試験への対応として適切なのはどれか。

- a インターフェロンのみを中止する。
- b 1週間の中断後、再開を判断する。
- c 血清ALT値の改善がみられるのでそのまま継続する。
- d 患者の意思に従い直ちに中止する。
- e 輸液を行って継続する。

17 48歳の男性。病歴と身体所見から慢性閉塞性肺疾患の可能性が20%と予測された。仮にこの疾患の診断に関して感度90%、特異度80%の新しい検査法が開発され、検査陽性であったとする。

この患者が慢性閉塞性肺疾患である可能性はどれか。

- a 34%
- b 53%
- c 66%
- d 80%
- e 97%

18 72歳の女性。悪寒・戦慄を主訴として来院した。数日前から頻尿傾向にあったが、来院2日前から元気がなくなり食欲も低下していた。意識は清明。体温40.5℃。呼吸数21/分。脈拍104/分、整。血圧106/64 mmHg。尿所見：蛋白1+、糖(-)、潜血1+、沈渣に赤血球2~3/1視野、白血球多数/1視野、顆粒円柱(+)。血液所見：赤血球520万、Hb 15.9 g/dl、Ht 45%、白血球19,100(桿状核好中球14%、分葉核好中球62%、好酸球0.5%、好塩基球0.5%、単球4%、リンパ球19%)。血清生化学所見：尿素窒素18 mg/dl、クレアチニン0.9 mg/dl。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.48、PaO₂ 85.6 Torr、PaCO₂ 25.8 Torr、HCO₃⁻ 19.0 mEq/l。

考えられる病態はどれか。

- a 換気障害
- b ショック
- c 腎不全
- d ケトアシドーシス
- e 敗血症

19 65歳の女性。突然発症した左前胸部痛と呼吸困難とを訴えて来院した。来院時、呼吸数32/分。脈拍116/分、整。血圧92/58 mmHg。顔貌は苦悶様である。左胸部で呼吸音は聴取されない。胸部エックス線写真(別冊No. 3)を別に示す。

この患者の治療で最も重要なのはどれか。

- a 酸素吸入
- b 静脈路確保
- c 昇圧薬投与
- d 胸腔ドレナージ
- e 陽圧人工呼吸

別冊
No. 3 写真

20 19歳の男性。バイクで走行中に立木に激突し、救急車で搬入された。事故直後は意識清明であったが、搬送中に昏睡状態となった。来院時 Cheyne-Stokes 呼吸と瞳孔不同とを認める。視診では明らかな外傷はない。

まず行うべき検査はどれか。

- a 脳波
- b 脳血管造影
- c 頭部単純CT
- d 腰椎穿刺
- e 頭部超音波検査

21 6か月の乳児。2日前から続く発熱、嘔吐および下痢を主訴に来院した。体重は7,410 gで、2日前に比べて390 g減少した。体温38℃。脈拍144/分、整。大泉門は軽度陥凹している。口唇は乾燥し、咽頭は発赤している。心雑音はない。胸部でラ音を聴取しない。腹部は平坦で肝・脾は触知しない。皮膚緊張度は低下している。排尿はみられない。

この患児の初期輸液の組成で適切なのはどれか。

	Na (mEq/l)	K (mEq/l)	Cl (mEq/l)	乳酸 (mEq/l)	ブドウ糖 (%)
a	154	0	154	0	0
b	90	0	70	20	2.6
c	35	20	35	20	4.3
d	30	0	20	10	4.3
e	0	0	0	0	5.0

22 35歳の女性。半年前から両眼瞼と両側肘部とに皮疹が出現し目立つようになってきたため来院した。アキレス腱の肥厚を認める。眼瞼の写真(別冊No. 4A)と皮膚生検 H-E 染色標本(別冊No. 4B)とを別に示す。

考えられる基礎疾患はどれか。

- a 痛風
- b 高血圧症
- c 高脂血症
- d 関節リウマチ
- e 甲状腺機能亢進症

別冊
No. 4 写真A、B

23 40歳の男性。呼吸困難のため救急車で来院した。2日前から感冒気味で咽頭痛があった。昨夜から発熱と嚥下痛とが出現し徐々に増悪し嚥下困難となり、明け方から呼吸困難を自覚するようになった。体温 38.9℃。脈拍 96/分、整。胸部の聴診では異常を認めない。ふくみ声であるが扁桃は軽度の発赤を認めるのみである。喘息の既往はない。

まず行うべき検査はどれか。

- a 心電図
- b 呼吸機能
- c 喉頭ファイバースコープ
- d 食道造影
- e 頸動脈造影

24 67歳の女性。突然の眼痛、頭痛、悪心および嘔吐を訴えて来院した。結膜充血がみられ、角膜は浮腫状である。

診断に最も有用な検査はどれか。

- a 視力
- b 視野
- c 眼圧
- d 眼底
- e 脳波

25 75歳の男性。最近、言動がおかしいことに気付いた家族に伴われて来院した。半年前から「気が滅入る。」と言い、1日中臥床がちである。食欲低下、体重減少および興味・意欲の減退がある。「自分は癌でもうすぐ死ぬ。」「我が家は破産だ。」とあり得ないことを言っている。毎晩酒を飲まないで眠れなくなった。身体的異常はない。

最も考えられるのはどれか。

- a うつ病
- b 意識障害
- c 老年期痴呆
- d アルコール依存症
- e 統合失調症(精神分裂病)

26 78歳の女性。昨夕から続く腹痛で午前9時に来院した。3日前から排便がなく、昨日朝から嘔気があり、今朝から嘔吐している。49歳時に子宮全摘術を受けた。意識は清明。身長 162 cm、体重 53 kg。体温 37.2℃。脈拍 96/分、整。血圧 148/96 mmHg。顔貌は苦悶様で皮膚は乾燥している。心音、呼吸音に異常はない。腹部は膨隆し、腸雑音は金属音である。腹部全体に圧痛を認めるが、抵抗はない。血液所見：赤血球 384 万、Hb 11.8 g/dl、Ht 37%、白血球 11,000、血小板 17 万。

最も適切な処置はどれか。

- a 制吐薬投与
- b 腸管蠕動促進薬投与
- c 下剤投与
- d 減圧チューブ挿入
- e 浣腸

27 12歳の女児。発熱と頭痛とを主訴に来院した。昨夜から発熱があり頭痛が出現し、市販の感冒薬を服用したが改善しなかった。身長152 cm、体重44 kg。体温39.5℃。脈拍96/分、整。血圧134/70 mmHg。見当識障害と項部硬直とを認めるが、明らかな運動麻痺はない。白血球16,000。脳脊髄液所見：初圧250 mmH₂O(基準70~170)、細胞数2,800/mm³(基準0~2)(多核球80%)、蛋白90 mg/dl(基準15~45)、糖25 mg/dl(基準50~75)。

診断に最も有用なのはどれか。

- a 脳生検
- b 脳波検査
- c 頭部CT
- d 脳脊髄液細菌培養
- e ウイルス抗体検査

28 45歳の男性。胸痛のため来院した。身長167 cm、体重83 kg。脈拍84/分、整。血圧164/104 mmHg。飲酒3合/日、喫煙40本/日。2か月前から階段を昇る時に前胸部痛が出現した。前医で行った24時間連続記録心電図で胸痛時にST低下が記録されている。呼吸機能検査で異常所見を認めない。

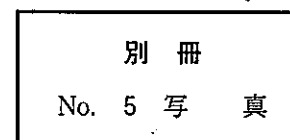
この患者に必要なものはどれか。

- a 禁煙指導
- b 減量(体重)指導
- c 降圧薬投与
- d 冠拡張薬投与
- e 在宅酸素療法

29 12歳の男児。3日前からの眼脂を訴えて来院した。両側の耳前リンパ節の腫脹がみられる。右眼部の写真(別冊No. 5)を別に示す。

この患児に対する生活指導で誤っているのはどれか。

- a 頻回の手洗い
- b タオルの個別使用
- c 家族より後の入浴
- d 登校の許可
- e プールでの水泳禁止



30 52歳の女性。1年前に糖尿病と診断され通院中である。糖尿病の改善に必要なことを指導されたが、日々の業務に追われ、日常の生活習慣は変わらない。空腹時血糖は徐々に上昇傾向を示している。

この患者で最も必要なのはどれか。

- a 意識啓発
- b 食事指導
- c 服薬指導
- d 運動処方
- e 精密検査

次の文を読み、31、32の問いに答えよ。

28歳の女性。初診時の医療面接で以下の会話がなされた(途中からの会話を掲載)。

医師① 「その頭痛についてももう少し詳しく話していただけますか。」

患者 「ええ、昨日はとにかくつらかったんです。朝起きた時から徐々に痛みが起り始め、日中はどんどんひどくなっていきました。それで仕事を止めて帰宅したんです。そしたら、吐いてしまいました。その後は、いつもの鎮痛薬を飲んで寝ました。」

医師② 「それはつらかったでしょうね……。」

(間を置いて)「それで、その薬はどんな薬ですか。」

患者 「近くの医院でもらっている“アスピリン”です。」

医師③ 「先ほど頭痛がひどくなってきたのは、この1～2年だとおっしゃいましたが、最初に起こったのはいつごろでしたか。」

患者 「そうですね、かれこれ10年ぐらい前だったと思います。」

(中 略)

医師 「どんな痛み方ですか。」

患者 「ズキズキという感じです。」

医師④ 「頭のどのあたりが痛くなりますか。」

患者 「多くの場合、右側です。ときに左側にも起こります。」

医師⑤ 「こんな症状が出ると必ず頭痛が起こるということがありますか。」

患者 「そういえば、目の前がもやもやしたり、キラキラしたのが見えると頭痛が起こる気がします。」

(以後略)

31 医師の発言①～⑤のうち、良好な医師患者関係の構築に最も寄与しているのはどれか。

a ①

b ②

c ③

d ④

e ⑤

32 この患者の頭痛の原因として最も考えられるのはどれか。

a くも膜下出血

b 脳出血

c 髄膜炎

d 片頭痛

e 脳腫瘍

次の文を読み、33、34の問いに答えよ。

26歳の1回経妊、未産婦。今朝、多量の性器出血と下腹部痛とが突然出現したため来院した。

現病歴：2か月前に経口避妊薬の服用を中止し、消退出血があった。その後、持続する性器出血があったが、自然に消失した。

現症：意識は清明。身長156cm、体重50kg。体温36.5℃。臥位で、脈拍68/分、整。血圧104/76mmHg。腹部はほぼ平坦であるが、下腹部に圧痛を認める。双合診で子宮の大きさは鶯卵大、軟。両側付属器に異常を認めない。腔鏡診で外子宮口から多量の出血を認める。

検査所見：血液所見：赤血球380万、Hb11.2g/dl、Ht35%、白血球6,300、血小板19万。

33 まず行うべき検査はどれか。

- a 尿沈渣
- b 血糖測定
- c 血清電解質測定
- d 尿妊娠反応
- e 腹部エックス線単純撮影

34 この患者の処置について正しいのはどれか。

- a 経過観察
- b 気道確保
- c 酸素療法
- d 静脈路確保
- e 腹腔穿刺

次の文を読み、35、36の問いに答えよ。

42歳の男性。頻回の嘔吐のために来院した。

現病歴： 2か月前から食後の上腹部膨満感が出現し、1週間前から時々嘔吐するようになった。上腹部に重圧感を自覚することもあり、一昨日から嘔吐が頻回になり、黒っぽい便が出ている。吐物は食物残渣のみで、血液の混入はなかった。

既往歴： 28歳時、十二指腸潰瘍に罹患し、服薬治療を行っていたが、再発を繰り返した。

現症： 意識は清明。身長170 cm、体重54 kg。体温36.9℃。呼吸数12/分。脈拍124/分、整。血圧98/58 mmHg。胸部に異常はない。腹部は平坦で、上腹部に圧痛を認める。腸雑音は正常である。

検査所見： 尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤血球242万、Hb6.5 g/dl、Ht20%、血小板39万。血清生化学所見：総蛋白6.5 g/dl、アルブミン3.8 g/dl、尿素窒素42 mg/dl、クレアチニン0.9 mg/dl、AST38単位(基準40以下)、ALT33単位(基準35以下)、LDH360単位(基準176~353)。

35 この患者の血清電解質で最も著しい異常が予想されるのはどれか。

- a ナトリウム
- b カリウム
- c クロール
- d カルシウム
- e 燐

36 まず行うべき検査はどれか。

- a 上部消化管内視鏡検査
- b 下部消化管内視鏡検査
- c 腹部血管造影
- d 腹部単純CT
- e 腹部単純MRI

次の文を読み、37、38の問いに答えよ。

64歳の男性。意識障害のため家族に付き添われて救急車で搬入された。

現病歴： 今朝、庭の植木の枝を切っていたところ、小型のハチ数匹に襲われ、手足を数か所刺された。薬をつけようと室内に入ったところで脱力と呼吸困難とを訴えて倒れ意識を失った。搬送中にけいれん発作が2回あった。

既往歴： 2年前、農作業中にハチに刺されたことがある。10年前から高血圧で加療中であるが、その他の疾患の既往はない。

現症： 応答はあるが意識は混濁している。体温 36.5℃。脈拍 140/分、緊張不良。眼球結膜に充血を認める。全身が発赤し膨疹が多発している。咽頭粘膜の腫脹を認める。心雑音はなく、肺野に wheezes (笛様音) を聴取する。腹部は平坦、軟である。腱反射に左右差はなく、病的反射を認めない。

37 この患者にみられる症候はどれか。

- a ショック
- b 脱水
- c 黄疸
- d 関節腫脹
- e 項部硬直

38 気道と静脈路との確保とともにまず投与するのはどれか。

- a 抗不安薬
- b 抗菌薬
- c エピネフリン
- d β 受容体遮断薬
- e 抗けいれん薬

次の文を読み、39、40の問いに答えよ。

72歳の男性。呼吸困難のため家族に付き添われて来院した。

現病歴：5年前から肺気腫による慢性呼吸不全で治療中であった。3日前から感冒様症状が出現し、その後呼吸困難が増強し階段の昇降が困難になった。

既往歴：特記すべきことはない。

現症：意識は清明。体温37.8℃。呼吸数18/分。脈拍108/分、整。血圧110/80 mmHg。下腿浮腫と頸静脈怒張とを認める。

検査所見：尿所見：蛋白1+、糖(-)。血液所見：赤血球450万、Hb 15.2 g/dl、Ht 43%、白血球10,200。血清生化学所見：総蛋白6.4 g/dl、尿素窒素25 mg/dl、クレアチニン0.8 mg/dl、AST 36 単位(基準40以下)、ALT 32 単位(基準35以下)、LDH 364 単位(基準176~353)、Na 140 mEq/l、K 4.0 mEq/l、Cl 102 mEq/l。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.32、PaO₂ 54 Torr、PaCO₂ 48 Torr。心電図で右室負荷所見を認める。

39 この患者にみられるのはどれか。

- a 脾腫
- b 肝腫大
- c 腎腫大
- d 腹部膨隆
- e Blumberg 徴候

40 まず投与すべきものとして適切でないのはどれか。

- a 酸素
- b 生理食塩液
- c 強心薬
- d 利尿薬
- e 気管支拡張薬

次の文を読み、41、42の問いに答えよ。

78歳の男性。全身倦怠感と尿量の減少とを訴えて来院した。

現病歴：昨日山菜を採りに行き、道に迷い歩き回った。足腰が痛くなり山中で座り込んでいるところを家族に今朝発見された。全身倦怠感があり、尿量も少なくなっている。

既往歴：69歳から前立腺肥大で加療中である。

現症：意識は清明。身長162 cm、体重57 kg。体温36.9℃。脈拍112/分、整。血圧86/54 mmHg。皮膚は乾燥している。胸部に異常を認めない。腹部は平坦で、肝・脾を触知しない。下腿に浮腫はない。直腸診で腫大した前立腺を触知する。

検査所見：尿所見：比重1.035、蛋白(±)、糖(-)、潜血(-)、沈渣に異常はない。血液所見：赤血球512万、Hb16.4 g/dl、Ht48%、白血球8,600、血小板22万。血清生化学所見：尿素窒素78 mg/dl、クレアチニン2.8 mg/dl、尿酸11.2 mg/dl、AST35単位(基準40以下)、ALT20単位(基準35以下)、LDH350単位(基準176~353)、CK45単位(基準10~40)、Na140 mEq/l、K5.0 mEq/l、Cl104 mEq/l、Ca9.2 mg/dl、P3.0 mg/dl。

41 まず行うべき検査はどれか。

- a 腹部超音波検査
- b 静脈性尿路(腎盂)造影
- c 腹部造影CT
- d 膀胱鏡
- e 前立腺生検

42 まず行うべき処置はどれか。

- a 利尿薬投与
- b 非ステロイド性抗炎症薬投与
- c 副腎皮質ステロイド薬投与
- d 輸液
- e 膀胱穿刺

次の文を読み、43、44の問いに答えよ。

1歳の男児。今朝39℃の発熱があり、けいれんをきたしたので来院した。

現病歴：2、3日前から咳と鼻汁とがみられている。けいれんは全身性、強直性であり、2～3分で消失した。哺乳力は良好で、下痢と嘔吐とはない。

既往歴：周産期に異常はなく、成長・発達は正常である。けいれんの既往はない。

現症：意識は清明。身長75cm、体重10kg。体温39℃。脈拍140/分、整。咽頭は発赤している。大泉門は平坦で、項部硬直はない。胸部に心雑音はなく、肺野にラ音を聴取しない。腹部は平坦で、肝・脾は触知しない。深部(四肢腱)反射は正常である。皮膚の緊張度は正常である。

検査所見：尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤血球450万、Hb 13.3g/dl、Ht 40%、白血球11,000(桿状核好中球4%、分葉核好中球56%、好酸球2%、単球3%、リンパ球35%)、血小板31万。血清生化学所見：血糖83mg/dl、総蛋白7.0g/dl、尿素窒素9mg/dl、Na 143mEq/l、K 4.0mEq/l、Cl 104mEq/l、Ca 8.9mg/dl。

43 検査所見で異常なのはどれか。

- a 好中球/リンパ球比
- b 血糖
- c 尿素窒素
- d ナトリウム
- e カルシウム

44 最も考えられるのはどれか。

- a 脱水
- b 上気道炎
- c 気管支喘息
- d 鉄欠乏性貧血
- e 髄膜炎

次の文を読み、45、46の問いに答えよ。

55歳の男性。呼吸停止状態でマスクによる用手人工呼吸を受けながら救急車で搬入された。

現病歴： 会社で電話中に後頭部に激しい頭痛を訴えて倒れた。同僚がかけつけたときいびきを伴う大きな呼吸をしていたが、救急車到着時には呼吸停止の状態であった。

既往歴： 高血圧を指摘されたが無治療であった。

現症： 意識は昏睡状態。体温 37.0℃。自発呼吸はない。脈拍は微弱。血圧 68/40 mmHg。左前額部に擦過傷を認める。瞳孔径左右とも 3 mm、対光反射は左右とも消失。心雑音はない。腹部に異常所見は認めない。

45 救急外来でまず行うべき処置で誤っているのはどれか。

- a 気管内挿管
- b 静脈路確保
- c ドパミンの持続投与
- d 心電図モニター装着
- e 心(臓)マッサージ

46 最も考えられる疾患はどれか。

- a 髄膜炎
- b 脳梗塞
- c てんかん
- d くも膜下出血
- e 慢性硬膜下血腫

次の文を読み、47、48の問いに答えよ。

63歳の女性。交通事故後に救急車で搬入された。

現病歴：自転車で乗っていて自動車に衝突され受傷した。

現症：意識は清明。体温36.7℃。脈拍104/分、整。血圧96/72 mmHg。骨盤周囲に強い圧痛がある。右下腿には開放創があり、泥が付着した骨折部が露出している。

検査所見：尿所見：黄色透明、蛋白(-)、潜血(-)。血液所見：赤血球350万、Hb 11.3 g/dl、Ht 32%、白血球11,000、血小板25万。骨盤エックス線単純写真(別冊No. 6)を別に示す。

別冊
No. 6 写真

47 静脈路確保を行った後、優先して行うべき検査はどれか。

- a 腹部エックス線断層撮影
- b 腹部単純CT
- c 腹部単純MRI
- d 腹腔穿刺
- e 腹腔鏡検査

48 骨盤病変への対応の後、下腿に対してまず行うべき処置はどれか。

- a 創の débridement
- b 骨折の整復固定
- c 筋膜の縫合
- d 神経の縫合
- e 静脈の縫合

次の文を読み、49、50の問いに答えよ。

51歳の男性。手指のふるえを主訴に来院した。

現病歴 : 3年前に肝機能異常を指摘され、1か月間の禁酒でAST、ALT、 γ -GTPが著明に改善した。その2か月後から再度常用飲酒が始まり、最近、手のふるえ、食欲不振および不眠を認めるようになった。アルコールによる肝障害を自分で理解しつつも、周囲から指摘されるのを拒み、飲酒問題を語ろうとしない。

既往歴 : 特記すべきことはない。

現症 : 身長170 cm、体重68 kg。脈拍72/分、整。血圧120/70 mmHg。安静時に両手指の細かなふるえがみられる。腹部はやや膨隆し、肝を右肋骨弓下に4 cm 触知する。

検査所見 : 尿所見: 蛋白(-)、糖(-)。血液所見: 赤血球450万、Hb 14.7 g/dl、Ht 44%、白血球7,200、血小板12万。血清生化学所見: 空腹時血糖110 mg/dl、AST 130 単位(基準40以下)、ALT 75 単位(基準35以下)、 γ -GTP 280 単位(基準8~50)、コリンエステラーゼ410 単位(基準400~800)。

49 飲酒問題を話し合うために、適切でない質問はどれか。

- a 人から「もう少し酒を控えた方がいいんじゃないか。」と注意されたことがありますか。
- b 飲酒であなたの心身がボロボロになってしまってもいいのですか。
- c 神経がいらいらしたり、二日酔いのため朝から飲酒したことがありますか。
- d 自分で「少しアルコールが過ぎるな。」と思ったことがありますか。
- e 飲酒について、後悔したり罪悪感を感じたことがありますか。

50 この患者の治療に関連のないのはどれか。

- a 精神保健福祉センター
- b 在宅介護支援センター
- c 自助グループ
- d 精神病院
- e 保健所

◎ 下記の欄に受験番号および氏名を記入すること。

受 験 番 号	氏 名 (楷 書 で 書 く こ と)